

採用施設一覧 (◎は基幹施設、○は連携施設)

- ◎大塚病院
- ◎墨東病院
- 広尾病院
- 豊島病院
- 荏原病院

- ◎小児総合医療センター
- 多摩北部医療センター
- 神経病院

研修プログラムの特徴

● 大塚病院 (基幹施設)

大塚病院施設群小児科東京医師アカデミー専門研修プログラム

プログラム責任者：小児科 古道 一樹 プログラム研修期間：3年
 連携施設病院：小児総合

日本大学医学部附属板橋病院 / 慶應義塾大学病院 / 島しょ等

本プログラムは子どもの総合医育成を目的としており、特定の専門領域に偏ることなく幅広い研修が可能です。1・2年目は都立大塚病院小児科で研修します。小児科指導スタッフは多彩な専門分野を幅広く網羅し、common diseaseのみでなく、複雑な背景を有する慢性疾患の診療を行っています。当科は基幹施設として2次までの救急患者を受け入れており、小児科医として欠くことのできない急性疾患の初期対応から集中治療管理まで一連の研修ができます。また、当院は東京都西北部の周産期医療を担う総合周産期母子医療センターであり、MFICU、NICU、GCUを有し、専門的な新生児医療の研修ができます。さらに当院には小児外科医、小児脳神経外科医、児童精神科医の常勤医がおり、小児の外科的疾患から心の問題まで幅広く経験できます。専門研修3年目に最長9か月間、連携施設である小児総合医療センター、日本大学医学部附属板橋病院、慶應義塾大学病院で、更なる専門領域の研修を行います。乳幼児健診・予防接種などの小児保健・社会医学は、3年間を通じて研修します。診療体制としてチーム制を導入しており、月4～6回の日当直業務の翌日はオフとしています。また、互いにカバーし合うことで、duty freeの週末を作れるようにサポートします。一般外来診療では、1年目の夏から、指導医のアドバイスを受けながら、ひとりで診療していただき、自立を促します。小児科の特徴である generalist としての研修を行うとともに、その先でご自身の方向性を定める機会を提供する、サステナブルな未来につながるプログラムを目指しています。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1年次	一般小児科 (独り外来開始)						一般小児科					
	1年次は大塚病院で一般小児科を研修。7月頃から独り外来診療を開始し、8月頃から独り当直を始めることを目標に研修を行う。											
2年次	一般小児科						新生児科			一般小児科		
	2年次も、引き続き大塚病院で一般小児科を研修。途中3か月間、大塚病院の新生児科で新生児疾患を研修。											
3年次	血液・悪性腫瘍、心臓、集中治療、小児救急など (小児総合医療センター等)									一般小児科		
	3年次は、大塚病院では研修できなかった分野を、外部施設 (小児総合医療センター、日大板橋小児科、慶大小児科より選択) で最長9か月間研修。											

○ 大塚病院で研修可能なサブスペシャリティ領域

新生児科

プログラム責任者：新生児科 大橋 祥子 プログラム研修期間：3年

新生児専門医は健常新生児および病的新生児に対する診療を行い、助言を提供する新生児医療の専門医であり、その専門医にふさわしい知識と技能を修得することを本コースの目標とします。具体的には胎児・新生児の成長・発達の正常および異常な側面について生理学的・病理学的に高度な理解と知識を有すること、産科的・内科的・外科的妊娠合併症とそれらが母体・胎児・新生児に与える影響について十分な理解を有すること、合併症を有する新生児の診断と治療に対する最新の専門的知識と技能を有すること、ハイリスク新生児の長期予後に関する高度な知識と健康調査の技能を有すること、を目標とします。研修期間は原則3年間で、多施設での研修も行います。3年間の研修で日本周産期新生児医学会・新生児専門医の受験資格が得られます。

● 墨東病院（基幹施設）

都立墨東病院小児科東京医師アカデミー専門研修プログラム

プログラム責任者：小児科 大森 多恵 プログラム研修期間：3年
 連携施設病院：神経/小児総合

聖路加国際病院 / 東京大学医学部附属病院 / 国立国際医療研究センター国府台病院 /
 獨協医科大学埼玉医療センター子どものこころ診療センター / 島しょ等

小児科一般領域全体に対応できる小児科専門医になることを目標とします。ほぼすべての領域にわたりもれなく経験できる体制となっています。1年目は当院小児科のみで1年間研修します。2年目は、当院新生児科（6ヶ月間）、当院小児科にて研修が不十分な血液・腫瘍疾患（3ヶ月）・小児麻酔（1ヶ月間）を院外研修します。3年目は当院小児科と、各自の希望に基づいた関連施設での研修となります。当院の研修はチーム医療での研修が主体となります。専攻医の下にはジュニアレドント、上には指導医として小児科専門医が配置され、1チーム6名前後で構成されます。院内での各チーム編成と関連施設研修では同学年の研修医は原則1名とし、同チーム・同研修施設で重複する研修医がないように設定します。研修1年目から週に1回の外来診療（午後）・月4回のER当直業務を担当します。外来診療では自らが主治医となった患児の退院後の経過観察が主体となります。ER当直業務では指導医の監督下に小児科医として欠くことのできない救急疾患の対応、急性疾患の管理・慢性疾患の初期対応を研修します。定期的に地域保健所にて乳幼児健診を指導医とともに行き、乳児健康診査・小児保健・社会医学を担当医として研修します。救急を含め症例数は豊富であり、概ね2年次までに小児科専門医取得に必要な症例は経験することが出来、学会発表・著者としての論文作成は終了します。そのため、3年時の研修は半年間を各自の希望により比較的自由に計画することが可能です。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1年次	小児科			小児科			小児科			小児科		
	1年目は当院小児科のみの研修となります。											
2年次	新生児科			新生児科			血液・腫瘍疾患 (聖路加国際病院)		小児麻酔 (小児総合医療センター)		小児科	
	2年目は当院新生児科（小児科とは独立しています、6ヶ月間）、聖路加国際病院（血液・腫瘍疾患、3ヶ月間）、小児総合医療センター（小児麻酔・1ヶ月間）、当院小児科（2ヶ月間）を行います。各研修の順番は他の研修医の研修内容と重複しないように時期を調整するため、順番が前後します。											
3年次	小児科			小児科			連携施設					
	3年目は当院小児科（6ヶ月間）、各自の希望に基づいた院外研修（6ヶ月間、小児総合医療センターなど）となります。											

○ 墨東病院で研修可能なサブスペシャリティ領域

新生児科

プログラム責任者：新生児科 九島 令子 プログラム研修期間：3年

本プログラムは、区東部医療圏の総合周産期センターである墨東病院にて新生児医療の研修を行うためのプログラムのうち、サブスペシャリティ研修として実施されるものです。当院は開設以来、区東部の周産期医療のうち新生児部門全体の役割をになっており、出生後の問題に対して治療をおこなっています。内容としては早産児への対応、新生児仮死への対応、先天異常児への対応、その他の出生後の異常に対して対応しています。当院の特徴としては、特に超早産児に対する救命率、および長期予後が全国的にみて良好な結果を納めてきている点であり、24週未満で出生した児や、500g未満の児に対する治療に慣れている。また周産期新生児専門医（新生児）の取得も目指します。

● 小児総合医療センター（基幹施設）

小児総合医療センター施設群小児科東京医師アカデミー専門研修プログラム

プログラム責任者：総合診療科 幡谷 浩史 プログラム研修期間：3年
 連携施設病院：広尾 / 大塚 / 豊島 / 荏原 / 多摩北
 立川相互病院 / 松戸市立総合医療センター / 山梨大学連携病院

当院の小児科専攻医は総合診療科に所属します。専門診療科の集まる小児病院の中にあつて、総合診療科は小児科医の基本・中核を専門とする科であり、病気を診るのではなく人を診る、かゆいところに手が届く医療を実践しています。専門診療科との垣根の低さが当院の特徴の一つであり、一般小児科を超える範囲について、各専門診療科と協力して、より良い医療を提供しています。また、ER患者（2023年度年間約4万人）および入院症例（平均42床）の診療を通じて、小児科の基礎を学び、抱いた疑問 clinical question から臨床研究に結びつけるよう、心がけています。そして、最も大切にしていることのひとつが若手医師の教育です。

3年間のプログラムで①1-3次救急（ERスタッフの協力のもと重症患者・外傷の初期対応、内科/外科疾患の入院対応）、②総合診療科外来（発達・成長障害、健診異常、不定愁訴など、主に急性疾患でない紹介患者さんが対象）、③予防医療（予防接種、こどもの事故予防、児童虐待）、④若手医師の教育（院外の初期、後期研修医の受け入れ）、⑤自主的な勉強会（外部講師招聘）、⑥国内外の学会発表、論文作成、⑦同期で一致団結でおこなう前向き臨床研究など、盛りだくさんのことを経験します。

専門医機構・小児科学会の指針の変更がある場合、適切にプログラムの改訂を行っていきます。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1年次	総合診療科							麻酔科	新生児科		救命救急科	
2年次	総合診療科			地域医療			専門科ローテーション					
3年次	総合診療科		集中治療科		専門科ローテーション		外来研修		総合診療科			

必修診療科：
 総合診療科 17か月（1年は担当医、2-3年は中級指導医）、麻酔科 1か月（1年6月～2年前半）、新生児科 3か月（1年6月～2年前半）、救命救急科 1か月（1年6月～3月）、集中治療科 2か月（2年～3年前半）、外来研修 1か月（3年）
 地域医療 3か月（1年後半～2年前半）多摩北部医療センターおよび周辺開業医、松戸市立総合医療センター、山梨大学連携病院
 専門診療科(選択)：8か月(2-3年)

○ 小児総合医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

新専門医制度
小児血液

プログラム責任者：血液・腫瘍科 湯坐 有希 プログラム研修期間：3年

小児血液学をサブスペシャリティに希望する、小児科専門医を既取得、又は初年度取得予定の研修生を対象とします。血液専門医取得には3年間の研修期間に「赤血球領域8例、白血球領域16例、血栓止血領域6例、計30症例（造血細胞移植症例1例を含む）」の経験、2件の学術発表を求められますが、2年次までに十分経験できる症例数を当科は持っております。また臨床研究や橋渡し研究、症例発表を積極的に行うことで学術発表も達成可能と考えております。また、小児血液学においては小児がんと呼ばれる悪性腫瘍の治療が重要ですが、当センターは小児がん拠点病院であり、臨床試験にも積極的に参加しており十分な研修を積むことが可能です。また、血友病診療連携地域中核病院であり、血友病をはじめとした出血性疾患の診療も豊富に経験できます。

こどもの
病院総合診療医

プログラム責任者：総合診療科 幡谷 浩史 プログラム研修期間：3年

小児科専攻医3年間で修了後、こどもの病院総合診療医になるために、以下の4項目が出ることを目標とした3年間のコースです。

- ①小児科の一般的な疾患に留まらず、希少疾患、先天疾患の病態の的確な理解の上に、専門科（専門施設）との確かなタイミングで相談・議論ができるようになる

- ②患者だけでなく、シニアレジデントやコメディカルに対して効果的なフィードバックをおこなう
 - ③臨床研究を通して医療の質を正しく評価し、得られた知見を臨床に適應する
 - ④さまざまな部門からなる医療チームの中心となり、病院機能全体を統合し、医療水準の向上を目指す専門性を身につける
- 目標を達成するために、総合診療科の研修とともに、院内各科や外部施設（計6か月未満）での研修も行います。

小児感染症

プログラム責任者：感染症科 堀越 裕歩 プログラム研修期間：3年

小児専門病院にて、幅広い分野での感染症診療が経験できます。コンサルテーションを通して、感染症に特化した集中型研修を行えます。小児感染症学会の専門医の教育認定施設、環境感染症学会の教育施設でもあり、感染対策、抗微生物薬の適正使用プログラム、微生物検査などの病院の質管理も経験できます。将来、自立して小児感染症全般のマネジメントができるようになるのが目標です。研究では、計画立案から実施をして、成果は全国学会、国際学会や学術誌に和文、英文で発表します。教育も力をいれており、国内での小児感染症教育でリーダーシップを期待され、講師なども務めます。院内で経験の少ない分野は、院外研修で補完します。本プログラムでは、国内外で活躍する小児感染症分野の次世代リーダーを育成します。

小児アレルギー

プログラム責任者：アレルギー科 吉田 幸一 プログラム研修期間：3年

東京都アレルギー疾患医療拠点病院にて行う研修コースです。小児科専門医（および取得見込み）を対象とし、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなどアレルギー疾患の重症例および多種合併例を多職種で連携して診療することを経験します。さらに、消化管アレルギー、食物依存性運動誘発アナフィラキシー、慢性蕁麻疹、薬剤アレルギー、ラテックスアレルギーなどの疾患の診療も学びます。後進に対して自らの知識・技術を伝え、充実した研究支援体制を活用し学会発表や論文の執筆活動なども積極的に行っていただきます。

また院外活動として、教育・保育施設のスタッフを対象としたアレルギー教室の講師を経験し、耳鼻咽喉科、皮膚科、成人のアレルギー診療を学びたい方は連携診療科・施設などで研修をおこなうこともできます。

小児循環器

プログラム責任者：循環器科 前田 潤 プログラム研修期間：3年

3年間の研修を通して、小児循環器学の専門的な知識・技術を学び、独力で診療を行う能力を身につけます。胎児期から成人期まで、先天性および後天性心疾患について、外来・入院患者の診療、検査の実施・解析、薬物やカテーテルによる治療などに携わります。患者・家族とのコミュニケーション、関連するスタッフとのチーム医療も円滑に行えるようにします。シニアレジデントの教育、学会発表や論文執筆などの研究にも積極的に関与します。研修終了後に小児循環器専門医レベルまで到達することが大きな目標です。今までの経歴によっては、受験資格のために数年の研修の追加が必要になりますが、当院での研修によって主な要件を満たすようにします。

小児内分泌・代謝

プログラム責任者：内分泌・代謝科 天野 直子 プログラム研修期間：原則3年

小児科専門医取得後に3年間の予定で、1) 疾患・病態の的確な理解、2) 遺伝子解析および変異の機能評価の解釈、3) 症例報告、臨床研究の実施、以上3点を具体的目標とします。

1年目：①低身長診断（成長ホルモン分泌不全性低身長、Turner症候群など）のための精査、先天性副腎皮質過形成症の診断および治療などの、診療の基本的事項を学ぶ。②全国レベルの学会で症例報告を行う。③簡単な遺伝子解析をする。④医療制度、医療経済について理解する。⑤臨床研究の計画を立案する。

2-3年目：①臨床研究を行い、学会発表、欧文誌への投稿を行う。②遺伝子変異の機能解析を理解する。③米国内分泌学会誌レベルの論文を批判的に読む。

小児腎臓病

プログラム責任者：腎臓・リウマチ膠原病科 濱田 陸（幡谷 浩史） プログラム研修期間：3年

小児科専門医取得後に、腎疾患全般の病態の理解とそれに基づく診療が行えること、臨床研究を遂行する能力を習得することを目標とした3年間のコースです。

診療に関しては、当院が全国でも有数の臨床経験があることを活かし、一般的な管理に加え高度で専門的な診療技

術の習得を目標とします。特に①乳幼児の慢性腎臓病から透析、腎移植までの管理、②難治性ネフローゼ症候群の免疫抑制薬治療、③成人科への移行期医療、④他科と連携した重症患者の管理（血液・腫瘍患者の腎合併症、神経免疫疾患に対する血漿交換療法、集中治療室で急性腎障害管理）に重点を置いております。

臨床研究は、当科が行っている種々の臨床研究（特定臨床研究や国際共同治験を含む）に携わり、新たな研究の立案、遂行から発表、論文作成までを目標にします。

小児神経内科

プログラム責任者：神経内科 三山 佐保子 プログラム研修期間：3年

1. 小児神経疾患をもつ患者や、日常生活・社会生活において援助を必要とする患者とその家族に対し、思いやりを持って真摯に接する態度を身につける。
2. 日本小児神経学会専門医委員会が定める「小児神経専門医のための到達目標・研修項目」を達成する。
3. ①急性期小児神経疾患 ②集中治療室に入室する重症小児神経疾患 ③他領域の小児内科疾患に合併する小児神経疾患

以上3領域は、当院において特に患者数が多く診療する機会が多い。上記疾患を経験し、適切な判断・治療方針の決定ができるようになる。

4. 指導のもと、小児神経疾患に関する臨床研究や学会・論文発表を行い、自ら研究テーマを探究する態度を身につける。

小児消化器科

プログラム責任者：消化器科 細井 賢二 プログラム研修期間：3年

当科は小児消化器を専門としており、小児の内視鏡検査・処置や腹部超音波検査を得意とする診療科です。便秘症などの common disease から炎症性腸疾患や胆汁うっ滞性肝疾患などの希少疾患まで経験できます。当科研修コースでは基本目標として以下の3項目を掲げます。1) 急性腹症や慢性消化器疾患、肝胆膵疾患の鑑別疾患を挙げ、診断・治療を行う、2) 腹部超音波検査（超音波下腸重積整復を含む）や消化管内視鏡検査・処置（消化管異物除去、止血術）を習得し、1人で実施する、3) 日本小児栄養消化器肝臓学会認定医と炎症性腸疾患学会専門医を取得する。他院では経験できない多くの消化器症例を経験しながら研修を行うことができ、小児科領域では習得者の数が少ない内視鏡や超音波などの臨床能力を獲得することができます。

小児外科

プログラム責任者：外科 富田 紘史 プログラム研修期間：2年

当科は小児専門施設の中でも日本トップレベルの手術件数を誇っており、また気道外科をはじめとする高度先進医療を行う中核施設の役割を担っています。このような環境の中で、外科医としての基本姿勢、基本手技を学ぶとともに、小児外科における専門的診療内容を経験しながら外科的手技を含むトータルケアを修得します。さらには臨床研究にも配慮し、今後の小児外科の発展を支えていく高い能力を持った小児外科専門医、さらには指導医を目指す小児外科医の育成を目指しています。

小児整形外科

プログラム責任者：整形外科 太田 憲和 プログラム研修期間：2年

1. 小児整形外科のコアになる疾患の対応を習得するため以下の内訳で合計60例以上を経験し、その治療、管理が行えるようになることを目標とします。
 - ①上腕骨顆上骨折：10名以上 ②上腕骨外顆骨折：5名以上 ③前腕骨骨折：10名以上 ④下肢骨骨折：5名以上
 - ⑤發育性股関節形成不全：10名以上 ⑥筋性斜頸：5名以上 ⑦O脚、X脚：5名以上 ⑧足部変形：5名以上
 - ⑨四肢の先天性疾患：5名以上

2. 学術的研究および発表

学会発表を年2回以上行う

2年間で1計画以上、臨床研究を主体となつて行う

(学会発表、臨床研究等のタイトルは、受け持った症例を参考に決定する)

小児脳神経外科

プログラム責任者：脳神経外科 井原 哲 プログラム研修期間：2年

【コース目標】

脳神経外科専門医取得（見込み）者を対象に、小児神経外科認定医に必要な知識・技能を習得する

【研修計画の概要】

研修を通じて小児脳神経外科医として独立して診療できる能力を養成する。

具体的には、小児脳神経外科領域の全疾患の診断・治療計画を立てられ、術前・術後の全身管理ができ、基本術式を実施でき、応用術式の助手を実施できることを目標とする。また、神経内視鏡手術を経験し、神経内視鏡技術認定医を取得する。小児医療で重要なチーム医療に精通し、研修医教育にも積極的に関わることが望ましい。

【研修目標】

基本術式の術者：50件以上

応用術式の助手：50件以上

学会発表 年間6件（全国学会3、地方学会2、国際学会1）以上

論文発表 年間1本

小児麻酔

プログラム責任者：麻酔科 西部 伸一 プログラム研修期間：2年

当院は小児の総合医療センターであり産科麻酔以外のすべての領域の麻酔管理を経験できます。産科手術をはじめとした成人麻酔は、関連研修施設である慶應義塾大学病院および東京医師アカデミー病院群で研修を行います。日本麻酔科学会専門医のほか、小児麻酔学会認定医、心臓血管麻酔専門医、区域麻酔学会認定医資格を取得できるよう、それぞれに必要な症例数および学術業績を獲得します。

- (1) 1年次は当院において、小児麻酔の基礎を学んだのち、新生児麻酔、先天性心疾患の麻酔、気管手術の麻酔などを担当する。
- (2) 2年次は希望に応じて、関連施設で集中治療、緩和医療、ペインクリニック、成人心臓麻酔、産科麻酔を研修する。日本麻酔科学会専門医資格を取得した後は、臨床指導医としての資質を磨く。

小児集中治療

プログラム責任者：集中治療科 齊藤 修 プログラム研修期間：3年

小児集中治療の実践には、こどもとその家族を中心に据えた高い倫理観が問われます。本コースでは急性期のこどもに人工呼吸器やECMOといった高度医療を適応させる知識・技量の獲得に加えて、将来にわたる予後を加味した高い知見を培っていただきます。また在宅医療を必要とする医療的ケア児、障害を負ったこどもなどに対してもその家族を含め、常に「より良い医療」とは何かを問い続ける姿勢も必要です。換言すれば、死の差し迫る超急性期にこそ問われる質の高いエビデンスをもった高度医療の実践と、俯瞰的にこどもと家族を見守る崇高な倫理観の滋養によって、真の小児集中治療医を育てることを目的としたコースとなります。

小児救急医学

プログラム責任者：救命救急科 萩原 佑亮 プログラム研修期間：3年

小児科医としての視点を持ちながら、救急医として救急医療を実践することで社会のセーフティネットとなるPediatric Emergency Medicineを専門する医師を育成します。救急外来を受診する小児患者の緊急度および重症度の判定を行い、すべての児に対して救命のための処置を含む適切な初期診療ができるようになること（専門分野に細分化された医療ではなく、外科系を含む多くの専門分野をひとりでカバーする横断的医療）、救急外来という資源や時間が限られた環境において目の前の患者に加えて救急外来全体の安全を担保した診療マネジメントができるようになること（時間的・空間的マネジメント）を目指す研修です。また、救急医療は社会とのつながりが強い領域であるため、アウトリーチを実践できる知識と技能を習得します。

新生児科

プログラム責任者：新生児科 岡崎 薫 プログラム研修期間：3年

【研修の特色】

- ・実践豊富な優れた臨床医の育成を目的とした包括的なプログラムです。
- ・新生児科および小児専門である全診療科の優れたスタッフの指導の下、新生児医療を幅広く学ぶことができます。
- ・重症新生児の治療や新生児搬送を1人に対応できるようになります。

【研修計画】

研修期間は3年間。周産期専門医の取得。希望によりプログラムの2年目後半6か月間に、専門診療科や研究機関、在宅施設などでの研修が可。

【施設】NICU 24床・GCU48床、年間入院数約700名。新生児専用救急車による新生児搬送（年間約200件）。低体温療法、一酸化窒素吸入療法、低酸素療法、交換輸血、胸腔穿刺、気管支ファイバー、内視鏡、など。主な対象疾患は、極低出生体重児（年間約90名）、新生児仮死、循環器疾患、外科疾患、など。

臨床試験科

プログラム責任者：臨床研究支援センター 森川 和彦 プログラム研修期間：3年

臨床研究や治験、医薬品・医療機器の開発に関する研修では、設計から遂行、解析、発表、論文作成まで全プロセスを一貫して行い、これらの臨床研究の実務能力を身につけることが目標です。本部・研究推進センターと連携し、東京都立病院機構全病院の研究を支援することで、小児以外の様々な分野の研究も経験できます。当科の研修では直接患者を担当せず、他科との併修も可能（該当科責任者の了承要）です。生物統計などの必要な知識を得るために院外の講義や研修も受けれます。臨床研究コーディネーター（CRC）、データマネージャー（DM）、生物統計家や、患者・家族や医療スタッフとの連携を学びます。倫理指針や法規に則った研究体制の整備、関連委員会運営にも携わります。本プログラムでは、臨床研究の専門家としてリーダーを育成します。

臨床遺伝科

プログラム責任者：臨床遺伝科 吉橋 博史 プログラム研修期間：3年

外来診療（約3000件/年）、初診（約400件/年）、病棟依頼（約300件）の豊富な症例数を通じ、小児難病、がんゲノム医療、周産期遺伝医療、移行期医療を体系的に学びます。その人らしい自律的な意思決定を支援し臨床ゲノム医療を担う人材の育成を目指します。

<研修計画の概要>

1. 先天異常症候群：形態異常診断学に基づく診断の知識とスキルの習得
2. 遺伝学的検査：適応、解析原理、検出限界、結果解釈の説明
3. ゲノム医療：様々な専門診療科と連携したゲノム医療の実践
4. 遺伝カウンセリング：認定遺伝カウンセラーと協働したクライアントの意思決定支援
5. 先天異常症候群のトータルケア：胎児期から成人期までの様々な移行医療支援
6. 遺伝医療の啓発と普及：教育・学術活動を通じた遺伝医療への貢献

● 広尾病院（連携施設）

指導医責任者：小児科 山本 康仁

連携をしている基幹施設病院：小児総合

小児科専門医の取得を目的として、都心の急性期病院である当院と、基幹病院である小児総合医療センターで、幅広く一般小児医療と救急医療を経験します。新生児医療は大塚病院で3ヶ月かけて研修し、専門領域については、小児総合医療センターの各専門診療科で経験できるほか、0～6ヶ月間日本大学医学部附属板橋病院や日本大学病院の専門診療班をローテートする選択肢もあります。また、研修期間を通じて、予防接種や乳児健診、地域の保健医療・福祉機関や教育分野との連携など、小児科医として必要なスキルを身につけることができます。実際の研修コースは、各人の希望を踏まえ、3年間という限られた時間を有効に使えるよう、指導医と一緒に考えながら作っていきます。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 年次	広尾病院 1年次は、広尾病院で一般診療と救急医療、正常新生児を幅広く研修する。											
2 年次	大塚病院新生児科			小児総合医療センター（総合診療科、各専門診療科） 2年次は、大塚病院で未熟児新生児の研修を行うほか、小児総合医療センターで一般診療、救急医療、専門領域の研修を行う。								
3 年次	広尾病院（日大板橋病院）			広尾病院（日本大学病院）			広尾病院 3年次は、日大板橋病院・日本大学病院を0～6ヶ月選択し、専門診療班で研修を行うことも可能。広尾病院では一般診療に加え、アレルギー疾患、心身症などの経験を積みながら、専門医に求められる知識の総点検を行う。					

● 荏原病院（連携施設）

指導医責任者：小児科 佐藤 弘之
連携をしている基幹施設病院：小児総合

小児科コースは、小児科専門医の取得を目標として、日本小児科学会専門医研修ガイドラインに準拠して研修を行います。基幹施設は、小児総合医療センターで、当院、及び大塚病院新生児科を連携施設とします。研修期間は、18ヶ月を小児総合医療センターで、12ヶ月を当院で、6ヶ月を大塚病院新生児科で研修します。小児科専門医の取得には、感冒などの common disease から症例報告するような稀な疾患まで、幅広い疾患領域を経験する必要があります。また、これからの小児科医には、疾患の診断、治療だけでなく、小児保健、育児支援、健康支援、予防医療など、子どもの健全な発育を総合的に支援できるようになることが求められています。これに対応するように、本コースでは、高度医療を行う専門施設と地域に密着した二次医療機関という複数の施設で研修することによって、general pediatrician から subspecialty まで、臨床から研究まで、幅広く対応できるカリキュラムになっています。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 年次	小児総合医療センター 1年時には高度医療施設で、総合診療、三次救急、ICU 管理などを研修する。											
2 年次	荏原病院 2年目から3年目の前半は、地域の二次医療機関として、common disease や小児保健を含めた general pediatrician としての研修を行う。											
3 年次	大塚病院新生児科						小児総合医療センター 最終年度後半は、subspecialty として、研究テーマをもって研修する。					

● 多摩北部医療センター（連携施設）

指導医責任者：小児科 小保内 俊雅
連携をしている基幹施設病院：小児総合

多摩北部医療センターは北多摩北部5市を保健医療圏とする基幹病院です。地域の中核病院として、小児二次救急医療や医療的ケアの必要な在宅重症児に対する診療、また登校困難や発達障害など幅広く入院を受け入れています。また、神経、腎泌尿器、内分泌代謝、アレルギー、呼吸器、発達、消化器等の専門外来を開設しており、専門性の高い診療も展開しています。このような診療を背景に、救急受患者数は年間3,000例を超えており、入院患者数も500例を超え豊富な臨床経験を積むことが可能です。研修内容は、初年次には小児診療の基本的疾患について学びます。救急外来で初期対応を、また病棟では入院症例の治療計画を自分で立案し、実際の診療を遂行する能力を養います。2年次は半年間小児総合医療センターにおいて、新生児医療、小児集中医療および小児麻酔を5か月間学ぶとともに、府中療育センターにおいて療育の実践についても1か月研修を行います。最終年では将来の専門を見据えてより高度な医療を小児総合医療センターで選択科を6か月間研修してもらいます。

当科の研修は自主性を重んじます。与えられたプログラムを遂行する型の研修ではなく、自ら問題点を見つけ解決へアプローチするスタイルです。我々指導医は解答を与えるのではなく、一緒に思考する伴走的な立ち位置です。

こどもは地域で生まれ社会性を身に付けます。ですから、小児医療も地域との関わりが重要です。当院では地域密着型の小児医療研修を提供しています。

研修コース
モデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
1 年次	多摩北部医療センター 小児科 前半…主に入院症例を担当し小児科医としての基礎を学ぶ / 後半…救急外来にも対応できる能力を養う。												
2 年次	多摩北部医療センター 小児科						(小児総) PICU	NICU	麻酔				
3 年次	循環器	呼吸器	感染症	血液	アレルギー	皮膚	*府中療育	多摩北部医療センター 小児科					
	前半…小児総合にて専門科 20 領域の中から希望の科を選択 / 後半…一般臨床におけるさらなる研鑽をおこない、チームリーダーとしての自覚をたくむ / *府中療育センターにて研修 (1ヶ月)												

○ 多摩北部医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

小児内分泌・糖尿病

プログラム責任者：内分泌・代謝内科 藤田 寛子 プログラム研修期間：3年

小児内分泌・糖尿病専門研修コースは、小児科専門医を取得または取得見込みの方が内分泌専門医（小児科）・糖尿病専門医（小児科）を目指してサブスペシャリティとしての内分泌代謝疾患・糖尿病の研鑽を積む為のコースです。小児領域では成長や発達への影響を斟酌した診療が必要ですが、小児発症の内分泌代謝疾患や糖尿病は生涯にわたり管理を要することが少なくありません。本コースでは専門医受験資格として必要とされる、学会認定教育施設での3年間の研修を小児総合医療センターと連携し、まず同院で1年6か月、その後多摩北部医療センター内分泌・代謝内科で1年6か月間行います。なお、内科研修中も小児科臨床のレベルを維持するために小児科の当直勤務は適宜行います。

小児神経内科

プログラム責任者：小児科 大澤 由記子 プログラム研修期間：5年

小児神経学会が定める「小児神経専門医のための到達目標・研究項目」に則り、神経疾患の診療にあたり、診察方法や検査項目、治療法を主体的に決定できるようになることを目標とし、5年間の必須研修項目を履修できるよう、当院と連携関連施設に従事する。1-2年次、当院で基本的な神経診察を学び、病棟医として神経疾患の鑑別を挙げ、自主的に診療ができることを目標とする。3-4年次は、関連施設でより専門的な免疫学的治療、急性期医療や脳神経外科、脳神経放射線科、急性期リハビリテーション、慢性期神経疾患である重度心身障害児診療の経験を積み、専門外来を担うのに必要な知識を習得する。最終年次には臨床研究や学会・論文発表を行い、小児神経学の発展に貢献できる資質を育む。また、てんかん専門医研修も併せて可能である。

● 神経病院（連携施設）

○ 神経病院で研修可能なサブスペシャリティ領域

神経小児科

プログラム責任者：神経小児科 熊田 聡子 プログラム研修期間：1～3年

当科には、小児神経学全般はもちろん、不随意運動、てんかん、神経・筋疾患、遺伝学などを指導できる専門医が揃っています。院内の脳神経内科や脳神経外科との連携も緊密で、検査部門（神経放射線、神経生理、神経病理）も充実しています。また、隣接する都立小児総合医療センターの総合診療科や神経内科とも強く連携しています。このため、外科治療を含む不随意運動ならびにてんかんの診療、神経免疫疾患、代謝・変性疾患、神経・筋疾患、脳炎・脳症を含む神経救急など、小児神経学を幅広く、かつ、深く学ぶことができます。院内のカンファレンスや勉強会は大変充実し、学会発表も盛んです。小児科一般を学ばれた先生方が小児神経の研鑽を積むために最適なプログラムをご用意して、お待ちしております。



(小児総合医療センター 小児科・精神科①壮行会)



(小児総合医療センター 小児科・精神科②壮行会)